

## ソール・ペローと賭博者達

北 川 典 子

ソール・ペローは処女短篇「朝のモノログ二題」をはじめとして、多くの作品に一連の賭博者達を登場させた。彼らの創造にはペローの生まれ育った環境、賭博やギャングや犯罪が横行するシカゴとその移民地区の影響がまず第一に考えられるだろう。しかしペローが物心ついて以来遭遇した様々な人の中でも特に賭博者に執着し、描写し続けたことは、賭博者達が一か八かの運命に身を委ね、でたらめな生活を送る人物としての意味を遥かに越えて、ペローの抱えるテーマに本質的に深く関わっているからと考えられないだろうか。この小論では、「朝のモノログ二題」から賭博師と呼ばれる男、『宙ぶらりんの男』からスタイドラー、『犠牲者』からオールビー、『この日を掴め』からこの系譜の人物の集大成とも言えるタムキン博士、この4名の賭博者達をとりあげ、彼らの特質と役割、又その変遷を考えることにより、ペローが多くの作品で表現しようとしているテーマ、即ち、混沌とした世界への鋭い認識や「際限のない渴望」<sup>(1)</sup>に支配された人間の生きざまの中から、虚偽を見抜き真実を掴むことと、賭博者及び賭博性との関係を明らかにしてゆきたい。

1941年に発表された処女短編「朝のモノログ二題」の後半「午前11時30分 賭博者」には、朝早くからその日の競馬の本命を占い、トランプ賭博に思いをはせる賭博師が、主人公として登場する。作品冒頭で描写される、競馬、トランプ賭博、ダイスの偶然性、危険性は、これ迄の人生を「大障害物競馬」<sup>(2)</sup>になぞらえる彼に対して、飛行機事故や野戦の弾丸、摩天楼の崩壊などに満ち溢れた、秩序も調和もない、正しく賽の目のように変わる予測のつかない不確実な世界を強く示現するものである。

What does it amount to? Close my eyes and pick, I may as well. It turns out the same; mostly sour loss. System is nothing and to try to dope them is just wasted. It isn't a matter you reach into yourself for, bringing it up and showing it to the eyes, open proof. The card is dark, always; the dice to the last roll. Even horses. Even? Better say especially.<sup>(3)</sup>

But it's the other way around too, in the same coin, when planes collide in all the room in the world, or you step out to meet the train front on, or the bullet in the field. A

good example is that couple necking in Bucharest in their Ford when the skyscraper fell.(4)

彼が人生に立ち向かう際の手段は、ペアを合わせたりストレートをぶつけたりといった、一か八かのトランプの持ち札の組み変えのようなものであって、否が応にも世界の危険性・不条理性を一層鮮明に浮き上がらせる効果を持っている。

彼が競馬やダイスで虎視たんたん狙っているのは、額に汗することなく大穴を当てて大金をせしめることであるが、それでは危険と不条理の支配する世界での人生における賭博性は、どのように表現されるのであろうか。ペローはこの点について、「彼ら」(5) と呼ばれる普通の人々、1日12時間も働き通しの料理人や店員達、地道に働き続けて底辺から社会を支えている大多数の人々を背景に、彼らと賭博師の関係に触れながら対照的に描いてゆく。賭博師が信条としているのは、人の良いカモである普通の人々にたかりつつ、困難を要領良く「すり抜け」(6)、「大物」(7)になることであるが、この彼の信条は、危険と不条理に支配された世界の中で踏み倒された彼らの屍を横目に、自らは「死滅しない」(8) こと、「自らの力で世界をコントロールすること」(9)へと発展してゆく。

To get around it counts. Slipping through. So far even in the Grand National for peacetime privates. But that I expected.... I don't think they'll get to me, either. If they do it's up to me to cover all the angles. There's a way through the cracks. This city, this country, is full of them and it's up to people like me to find a way through them.(10)

Then you believe it's all in the way you manage. Manage right and be a big-shot. Manage right and never die. Fight him back with a stick ; blow back in his face. It's in your hands to do it and in your power.(11)

以上に述べた賭博師の2つの特質は、3年後に出版された処女長編『宙ぶらりんの男』に登場するスタイドラーに引き継がれてゆく。彼は主人公ジョーゼフの高校時代の友人で、道路の穴掘り、排煙監視係など雑多な仕事を渡り歩いた末に第2次大戦に徴兵されるのだが、そのでたらめな態度から分裂症と誤診される。兵役を免除された後も正業にも就かず、競馬、女漁り、たかりなど、自堕落な生活を送っている。彼も又競馬や賭博、弟の交通事故、戦争への接近など、不確実で危険な世界の只中へ放り込まれた人間として描かれている。又、スタイドラーの人生における賭博性は、「俺は君（ジョーゼフ）達みたいな普通の人間じゃないからな、俺には戦争なんてできんよ……。俺の専門はうまくすり抜けることさ」(11) という彼の表現の中から、やはり人間を地道な努力を重ねる人々と、そうした生き方を軽蔑し抜け道を捜す人々に大別し、自らを後者

に位置づけるという考え方において見出すことができる。そしてこの自堕落な賭博者スタイドラーは、ノルウェイ娘を征服する駆引において自らの人並み優れた才覚を誇示しようとするのだ。

このようにみえてくると、「朝のモノログ二題」の賭博師及びスタイドラーの世界に関する認識は、ペローが『宙ぶらりんの男』の主人公ジョーゼフを通じて繰り返し表現した、「粗末で危険な」<sup>(13)</sup>世界、「汚なく酷く短い」<sup>(14)</sup>生存という認識と同質のものであることが推察されよう。ジョーゼフは、学問、芸術、恋愛、勇気、イデオロギー、戦争、宗教など人間の様々な営みを、こうした混沌たる世界の中で人間が自らを守るための奪闘努力であると考え、各々の理想、規範によって各人は安全で自由な自らの世界を構築し、この「理想の構築」<sup>(15)</sup>によって「独自の運命」<sup>(16)</sup>を追求しようとしていると洞察した。それは換言すれば、神や自然を失った現代人の「際限のない渴望」、死をも凌駕せんとする「偉大性」<sup>(17)</sup>の追求という狂信的な想念である。「朝のモノログ二題」の賭博師やスタイドラーが彼らの人生においてみせる偉大性や権力への志向も、ジョーゼフが看破した現代人の狂言的な想念と同質のものなのである。ペローが描く賭博者達は、その身におびた賭博性のゆえに、人間の置かれた状況と現代人の渴望に対するペローの基本的な考察を、一層鮮明に表現する人物像として重要な役割を担っている。

しかしながら賭博者達の狙いは、いかにカードを繰り合わせようとしても所詮は一か八かの綱渡りの方法で、勝算は到底おぼつかない。ぬかりなく計算し手立を立てたつもりでも、結局は、雨が降らないようにと小石を放り投げる子供達、悪運よけにと歩道の割れ目を踏まないよう細心の注意を払う子供達に例えられるような代物なのである。信じ込もうとすればする程、不安と疑念は心の内に黒雲となって広がってゆく。現在のりゅうとしたいでたちも、結局は「借金、家賃延滞、手袋の穴、たった一つの卵、安たばこ」<sup>(18)</sup>という結果になるという確たる予感で「朝のモノログ二題」は終わっている。スタイドラーの場合は更にこの予感を一步先におし進めた形で、「かつては粹だったに違いない外套も今はすり切れ、茶色のベルトも色が褪せて」<sup>(19)</sup>しまい、いよいよ手詰まりの状態となって登場する。両者は共に自らの試みが負け戦さであること、行きつく先が暗闇と絶望に色濃く支配されていることをも熟知している。

そして、彼らが大多数の普通の人々に比べて絶望により接近しながら、且、普通の人々と距離をおいた生き方をしていることが、むしろこの賭博性をおびた彼らに世界の虚偽性を看破する鋭い視点という新しい特質を加えてゆくこととなる。スタイドラーが除隊となった経緯は、彼の余りにいいかげんな態度に見切りをつけた軍医が分裂症とカルテに書き込んだためと語られているが、この分裂症的症候、ジョーゼフの言葉を借りれば、ディドロの『ラモーの甥』を連想させる「高潔と卑劣、良識と狂気」<sup>(20)</sup>という一見相矛盾するものの複合は、『宙ぶらりんの男』以降にペローが描くこの賭博性の内に棲息する系譜の人々、オールビーやタムキン博士らを彷彿とさせ

る、注目すべき特徴である。まともな生活から大きく踏み外れ、競馬や女漁りやたかりに時間を潰すスタイドラーの中に「高潔さ」があるとすれば、それはこの世界の低俗性、虚偽性に対する本能的な嗅覚から来るものだろう。ジョーゼフの次の観察は、スタイドラーの持つこの側面を指摘するものである。

There is no dignity anywhere, nothing but absurd falsehood. It is no use trying to bury this falsehood. It would only rise again, to laugh at you. He [Steidler] says this in so many words. When you ask him about the details of his life, he gives you a look of surprise. He is not offended; but that such admittedly shabby things should interest you surprises him genuinely.<sup>(21)</sup>

ジョーゼフが大義名分をかざした人々の営みの背後に、狂気じみた無限の渴望を見抜きつつも、長い苦闘の果てにも自らがそのジレンマから逃れられなかったのに対し、スタイドラーはその背後に潜む欺瞞性を本能的に把握し、彼らと同じ土俵から降りてしまうのである。

しかしながら『宙ぶらりんの男』の結末においてジョーゼフが、「僕は1人では目的を達することができなかった」<sup>(22)</sup>と語るように、ペローはこの作品では未だ主人公に救済を肉化するには到っていない。しかしペローの胸中に秘められた真理、虚偽を乗り越えるもう1つの世界観は、自然描写、二者並列の霊との会話、ジョーゼフの自己放棄の願望に秘められた二重性などから読みとることができる。更にジョーゼフが末尾で語る、恐らく戦争に行くことによって創造の謎を知ることができるかも知れないという執拗な望みなど、様々な形態をとって現出しており、ペローの胸中では直観的に把握されていたことが推察される。そしてペローはこの真理を、虚偽を看破する視点をもった賭博者達に先駆的に語らせながら一作毎に深化させ、遂に『この日を掴め』に到ってこの種の人物の集大成とも言えるタムキン博士を配することにより、主人公であるウィルヘルムに肉化したのではないだろうか。ペローの胸中にある真の世界が明確になってゆくにつれ、賭博者達が果たす救済のパターンやその原理も豊饒なものとなってゆく。この過程を、スタイドラーからオールビー、タムキン博士へと、順を追って検討することとする。

まずスタイドラーの場合、後の作品の賭博者達とは違って、救済の論理を自ら語るということはないが、彼の弟と妻に対する非道な仕打ちに、ペロー独得の逆説的救済のパターンの原型をみることができる。彼が弟からポケットマネーを盗み、勘違いした弟が妻を殴りつけるという事件があるのだが、彼は仲裁に入ることもせず、つき放した態度で事件を眺めながら、暴力沙汰を

ひき起こした方が二人のためになるという一見得手勝手な解釈を披露する。

Well, this may sound hard, and you [Joseph] may not believe it, but they're more human when they're fighting. Besides, it was like a movie. He suffered remorse, she forgave him because he was her man, and so on. They got a big kick out of it. I know. I was their go-between.<sup>(23)</sup>

つまりこの事件によって両者共に愛を再確認、強化することができたという解釈であり、この事件の描写には滑稽と諷刺の濃い味つけがされているが、ここにベローが後の作品で展開する救済のパターン、即ち、背徳的行為者が暴力的な力によって主人公を破滅へと追いやり、その結果皮肉にも一種の救済へ彼を導くというメカニズムが、パロディー化され、未だ未成熟で平板な調子とはいえ、打ち出されているといえよう。

スタイドラーにおいてその片隣を見せた世界観は、ベローにとって内奥のテーマと深く関る問題であっただけに、次の長編『犠牲者』に登場するこの系譜の人物、オールビーにおいては、真摯にその可能性が模索され、深い洞察に裏打ちされた論理へと引き継がれてゆく。

オールビーは名門出身、かつてはバラ色の未来を夢んでいた青年であったが、今では職もなく、妻にも先立たれ、酒浸りの浮浪者同然の生活を送っている。彼が失業する前、勤務先の社長に紹介した失職中の主人公レーベンサールが、面接の際に社長と大喧嘩をひき起こす。オールビーはこの事件が原因で餓首されたとして、レーベンサールにたかり続ける。若くして父を亡くし、苦勞の末に身を起こしたレーベンサールがその後安定した生活を築いていくのに対し、そうしたことは単に幸運の結果で個人の力など妄想にすぎないと語り、人間が選択権を奪われた存在であると捉えるオールビーは、「朝のモノログ二題」の賭博師やスタイドラー同様、賭博性をおびた世界観に生きている。しかし人生の敗残者、逃亡者の群れに混じり、闇の中で暮らしてきたオールビーの人間についての分析は一段と辛辣で、おびただしい言葉があたかも内から溢れ出てくるかのように饒舌である。

...I'll say, speaking for myself, it's hard to believe that my life is necessary. I guess you wouldn't be familiar with the Catholic catechism where it asks, 'For whom was the world made?' Something along that line. And the answer is, 'For man.' For every man? Yes, for every last mother's son. Every man. Precious to God, if you please, and made for His greater glory and given the whole blessed earth. Like Adam. He called the beasts by

their names and they obeyed him. I wish I could do that. Now that's clever. For everybody who repeats 'For man' it means 'For me.' 'The world was created for me, and I am absolutely required, not only now, but forever. And it's all for me, forever.' Does that make sense?"<sup>(24)</sup>

彼は又、選択権を奪われたはずの人間がたまさか幸運に遭遇すると、あたかも自分の力で勝ちえたかのように自惚れ、その自惚れをいかに無限大に迄ひきのばそうとするかを、カトリックの教会問答に名をかりて巧妙に展開している。それは「世界が未来永ごうに亘って自らのために作られた」<sup>(25)</sup> という狂しい想念であり、自己の存在の必然性ひいては偉大性の際限のない証明でもある。オールビーは人間の生活の背後に隠れたこの恐ろしい様相を看破し、スタイドラーにあっては本能的に嗅ぎとられていたにすぎない人間生活の欺瞞性を、明確かつ先鋭的に告発する。

この現状分析と告発を土台として、彼は人生のどん底で、「何度も何度も叩きのめされて、死ぬことだけは免れたものの、これ以上の苦患には耐えられないと音をあげた」<sup>(26)</sup> 瞬間に擱んだという悟りを、得意げにしゃべり続ける。そのセリフは、ソクラテスからギリシャの海綿とりの話へ、或いはバプテスマのヨハネの言葉から最近の電気ショック療法へと、ペローが好んで使う象徴を孕んで右へ左へと大きく揺れ動きながらも、ペローが模索し、求め続けてきた世界を、一段と鮮明に、透徹した洞察を織りまじえて示すものである。

'Repent!' That's John the Baptist coming out of the desert. Change yourself, that's what he's saying, and be another man. You must be and the reason for that is that you can be, and when your time comes here you will be. There's another thing behind that 'repent'; it's that we know what to repent. How?... I know. Everybody knows. But you've got to take away the fear of admitting by a still greater fear.... We're mulish; that's why we have to take such a beating. When we can't stand another lick without dying of it, then we change. And some people never do. They stand there until the last lick falls and die like animals. Others have the strength to change long before. But repent means *now*, this minute and forever, without wasting any more time.<sup>(27)</sup>

ここには主人公レーベンサールが夢や予感の形でしか感じることのできない真実が、幾度となく罪を犯し目をそらし続けた自己の赤裸々な姿を映し出す冷徹な視線や、決定的破滅の瞬間を永遠に連なる今へと変容させてゆく人間の内的変革の可能性の呈示となって、ふつふつと溢れ出る。それはペローの心の内奥に存する真実の世界の断片的表出とも言えるであろう。

スタイドラーにあってはパロディー化され、未成熟かつ平板な調子でしか呈示しえなかった真実が、オールビーにあっては断片的とはいえ高度に発酵されたと考えられよう。そして更にこの真実の世界は、1956年に発表された『この日を掴め』に登場する、この系譜の人物群の中でも一際異彩を放つタムキン博士にあって更なる新展開をみせることとなる。尚、モーラグはタムキンに関するこれ迄の多くの批評を、(1)思想も人格も信頼できないとするもの、(2)人心を繰縦するために知識を悪用する人物とみなすもの、(3)思想と人格の矛盾は認めるが、その矛盾を解こうとはしないもの、の3種類に大別し、思想と人格の分裂を認めている点(3)に賛同しながらも、この分裂に対する踏み込んだ批評が不足していること<sup>(28)</sup>を指摘している。ベローが何故よりもよってでたらめな人物タムキンに自己の内奥の真実を語らせたのかは、依然として謎に包まれていると言えよう。タムキンは極めて異質な魅力に富む人物で、その思想のみで別稿を設けなくてはならないが、ここでは本論の主旨に沿って、賭博性とベローの世界観との密接な関わり合いを、タムキンの思想と人格の分裂という点に光を当ててひもとくこととする。

タムキンは正規の診察をしているかどうかは疑しい自称精神科医であるが、専らトランプ賭博や株の投機に時間を費している。現に彼は、主人公ウィルヘルムが負け続けているジン・ラミー（トランプの一種）の集りに毎晩のように参加し、ウィルヘルムのなけなしの700ドルを株に投機するようもちかけ、商品市場に明るいタムキンへの委任状を書かせてしまう。彼の語る過去は、治療をしたことがあるエジプトの王女であり、パープル・ギャングの一員だったデトロイトの暗黒街であり、「三、四十年もの間窮地をくぐり抜け」<sup>(29)</sup>不確実な世界の闇と絶望の中をくぐり抜けてきたその賭博性は、「異常に鋭い視力」<sup>(30)</sup>を持つ彼による欺瞞と真実の描写を織り混ぜながら、非現実や比喻や象徴を駆使して、一段とさえわたる。

彼は人間の最も奥底に潜む願望、「魂の究極の願望」<sup>(31)</sup>について、「『君、何者なりや？』何者でもない。それが答だ。何者でもない。核心の核心では何者でもないんだ！そこで言う迄もなくそれには我慢できないから、何者かになりたいと思うし、なろうと努める」<sup>(32)</sup>と自己問答する。この幻惑的な自己問答は、存在の意味を模索しつつも虚無の暗闇の中に行き暮れ、偽りの価値体系にすがりつく人間の形態を端的に示すものである。彼らがすすがる虚偽の生き方とは、「偽りの魂」<sup>(33)</sup>の命ずるままに自己の存在証明を計ることであり、人間としての「偉大性」や「独自の運命」、「際限のない渴望」へと連るものである。

この虚偽の生き方は金銭への欲望において、最も顕著に現れる。今や単なる物質への対価としてでなく、能力やそして人格までも計る尺度となった金銭を求めて、人は熾烈な競争を展開し、心の中に憎悪と攻撃の嵐をひき起こす。同時に、金銭を絶対的規範とする社会を内面化して自らを罵しり不満を募らせる。これらの現象は異常な迄の罪悪感をも惹起し、究極の攻撃である

殺人と自殺へと向かってゆく。人が商品取引所へ来て、「大もうけしてやろう (I'm going to make a killing) と言うのは偶然ではない」<sup>(34)</sup> というタムキンの言葉は、この間の事情を説明せんとするものである。

同様の現象は、愛についてすら引き起こされる。タムキンが自己問答に続き愛も又「自己主義」<sup>(35)</sup> であり「虚栄」<sup>(36)</sup> だと言うのは、絶対的無の暗闇からの敗退の途で自らを守るために愛が使われる時、存在の正当化のために愛が利用される時、本質において自己愛とならざるを得ないことを指している。ウィルヘルムが自己存在の全てを否定されんとするこの最後の瀬戸際に、父の愛と理解を狂しい程迄に求め、別居中の妻の元に残してきた愛犬に執着するのも、煎じつめればこの自己愛に帰結する。それゆえにこそ人は愛を口にしながら人を殺すことが可能となる。タムキンは愛と呼ばれる様々な行為にも又金銭への欲望と同様、憎悪、攻撃、殺意、及びそれらと表裏一体を成す罪悪感が潜んでいることを例証し、その虚偽性を告発する。

かくして人々は自らの自由を「虚偽の魂」に売り渡し、奴隷の身へと零落してゆく。タムキンは彼らが沈んでゆく底なしの淵を、「人が人の体の上を踏み歩く。踏まれる人間はあたり一面に転っていて、『深き淵』より泣き叫び」<sup>(37)</sup> 手をすり合わせる煉獄だと言って、その様相をありありとウィルヘルムの眼前に描き出すのである。この煉獄とは、ペローが『犠牲者』のエピグラフに掲げた波の逆巻く大海原、「哀訴し、怒りに燃え、絶望した……何千、何万、何世代かの」<sup>(38)</sup> 無数の顔が浮かぶ大海原ともいえるだろう。

タムキンがこうした人類の病弊に対して繰り返し用いた治療法は、過去への罪悪感を取り除くと共に未来への不安を捨てさり、「今とここ」<sup>(39)</sup> に集中することである。例えば、商品取引所への途上で知人のラパポート老人に出会ったウィルヘルムは、持株の動向を案じ、一刻も早く取引所へ戻りたいがために、目の不自由な老人からの助けを求める手を振りほどき、拒否しようとする。その時タムキンは、行方の知れない未来を思い思うことをやめ、「今のこの瞬間に生きねばならない」<sup>(40)</sup> と、ウィルヘルムに強引に案内役を引きうけさせるのである。

タムキンのこの「今に生きよ」「この日を掴め」<sup>(41)</sup> という教えは、生と死を孕む自然のイメージとの連結によって、爆発的に豊饒なものへと飛躍する。

If you could have confidence in nature you would not have to fear. It would keep you up. Creative is nature. Rapid. Lavish. Inspirational. It shapes leaves. It rolls the waters of the earth. Man is the chief of this. All creations are his just inheritance. You don't know-what you've got within you.<sup>(42)</sup>

Nature only knows one thing, and that's the present. Present, present, eternal present, like a big, huge, giant wave-colossal, bright and beautiful, full of life and death, climbing



into the sky, standing in the seas. You must go along with the actual, the Here-and-Now, the glory-(43)

現代人は「虚偽の魂」の命ずるままに、人工的な試みによって自然から分断されてしまっているが、危険と不条理に満ちた混沌たる自然、人間が隠蔽してきた暴力、腐敗、死をも孕む自然に回帰することにより、「真実の宇宙」<sup>(44)</sup>に遭遇する。それは「総決算」<sup>(45)</sup>と「審判」<sup>(46)</sup>の最後の瞬間であると同時に、これ迄自分をつき動かしてきた「際限のない渴望」から解放され、「静謐」<sup>(47)</sup>へと到る決定的瞬間、攻撃から受容へ、否定から肯定へ、死から生へと、生のベクトルが決定的に転換し、「魂の究極の願望」が成就する瞬間である。タムキンが総力をあげてウィルヘルムに示してきたのは、この新たなる地平、決して奪い去られることのない真実の価値が人間に与えられ、愛が生への感謝となる地平だったのである。

しかしタムキン自身虚偽の世界から完全に訣別した訳ではなく、救済の体現者とはなり得ていない。金銭について語る彼は、冷静さを装いながらも、熱病のような思いとほの暗い動機を見え隠れさせる。ウィルヘルムに投機の旨みを説明しながらタムキン自身、「正直に言うけど、僕はじっとしておれない。投資にまわせる金が何ドルかあるだけで財産をつくっている連中のことを思うとね。頭もなければ才能もなく、ただ余分な金があるだけで、もっと金をかせいでいるんだ。僕は腹が立って気になってとてもじっとしておれない。じっとしてなんかおれないんだよ！」<sup>(48)</sup>とその真情を吐露してしまうのだ。又、過去の告白という形ではあるが、自分が売り渡した訴訟で後に思わぬ大金を失ったことから、相手の弁護士に殺意を抱いたことすら認めている。彼も又一面、金銭をめぐる「際限のない渴望」に駆り立てられているのである。

又一方では、ほら吹きで自信に溢れたタムキンが、内に絶望の予感を秘めていることも見逃してはならない。この点について『この日を握め』の中で顕在的に示されている部分は殆どないが、「朝のモノログ二題」の最後の文において、「……小わきの汗のしみが広がって」<sup>(49)</sup>絶望に切り裂かれた賭博師の予感を締め括っていることを考える時、「タムキン自身の立場だって決して良くはないのだろう……その証拠には、金のことになると血の汗をたらしながら小切手にサインしたではないか」<sup>(50)</sup>というウィルヘルムの観察は、微妙にして重要である。タムキンも又「朝のモノログ二題」の賭博師同様、不安と絶望に切り裂かれた存在であり、だからこそ彼が、「自分の精神をもう一段高い所へ引きあげたい……。自分がする予言を自分に信じ込ませ、自分の心に自ら触れたい……」<sup>(51)</sup>という根源的な願望をもち、それが自らの救いへの希求を合わせもっているようにウィルヘルムの目には映るのである。

かくして彼は、真実の世界と虚偽の世界の根本的分裂を内にかかえこむ、微妙で複雑な人物と

なり得た。そして一攫千金を目指す一か八かの賭博性と、賭博性において看破し得る真実の世界という、一見背反する二重性のゆえにこそ、ウィルヘルムを決定的に引きつけることになる。ウィルヘルムはなげなしの「700ドルを賭けてしまい」<sup>(52)</sup>、賭博者の生き方へと身を連ね、漆黒の闇の究極の果てまで落ちて行きながら、タムキンが口にする真実の世界の断片に、知らず知らずの内に強烈に引きこまれてゆくのである。タムキンがもし『犠牲者』のシュロスバーグのような真実の世界の体現者であったなら、ウィルヘルムを強くひきつけることは困難だったに違いない。このタムキンの異彩な魅力こそ、ウィルヘルムのみならず、虚偽の世界と真実の世界の狭間に揺れ動く我々の心を魅了してやまないのである。

以上、ペローの作品に登場する4人の賭博者達は、一見いいかげんででたらめな、どこか胡散臭い人物として登場するのであるが、彼らはその賭博性というものの持つ本質的な特質、即ち、絶望や闇との接触、及び普通の生き方から身を離すことにより虚偽を見抜き真実を掴む力をも合わせもつ人物群であるのであり、ペローのテーマの根底にある混沌とした世界という認識や「際限のない渴望」を表現するのに、重要な役割を果たし続けている。同時に、彼らの虚偽と真実に関する原理をたどれば、一作毎に発酵、成熟が進んでいるのであり、そこには作者ペローの成熟の過程をみることも可能だろう。そしてペローは遂に『この日を掴め』に到って最も困難な仕事、「魂の究極の願望の成就」<sup>(53)</sup>のドラマを、真実と虚偽の両方の世界に深く足を踏み入れている賭博者の導きによって、肉化したのではないだろうか。このように賭博者達は、ペローにとって必要不可欠な重要な役割を果たしつつ、その賭博性と、賭博性のゆえに看破しうる真実という二重性を見事な迄に呈示することにより、我々をひきつけてやまない。

#### 註

- (1) Saul Bellow, *Dangling Man* (New York: The Vanguard Press, 1944), p. 88.
- (2) Saul Bellow, "Two Morning Monologues," in *Partisan Review* 8 (May-June, 1941), p. 235.
- (3) *Ibid.*, p. 234.
- (4) *Ibid.*, p. 235.
- (5) *Ibid.*
- (6) *Ibid.*
- (7) *Ibid.*, p. 236.
- (8) *Ibid.*
- (9) *Ibid.*, p. 235.
- (10) *Ibid.*
- (11) *Ibid.* p. 236.
- (12) Saul Bellow, *Dangling Man*, p. 130.
- (13) *Ibid.* p. 40.
- (14) *Ibid.*

- (15) *Ibid.*, p. 140.
- (16) *Ibid.*, p. 88.
- (17) *Ibid.*, p. 89.
- (18) Saul Bellow, "Two Morning Monologues," p. 236.
- (19) Saul Bellow, *Dangling Man*, p. 127.
- (20) *Ibid.*, p. 127.
- (21) *Ibid.*, pp. 148-9.
- (22) *Ibid.* 190.
- (23) *Ibid.* p. 132.
- (24) Saul Bellow, *The Victim* (New York; New American Library, 1974), p. 194.
- (25) *Ibid.*
- (26) *Ibid.*, p. 227.
- (27) *Ibid.*
- (28) Gilead Morahg, "The Art of Dr. Tamkin," in *Saul Bellow*, Harold Bloom, ed., (New York: Chelsea, 1986), pp. 148-9.
- (29) Saul Bellow, *Seize the Day* (Harmondsworth: Penguin Books, 1966), p. 96.
- (30) *Ibid.*, p. 78.
- (31) *Ibid.*, p. 118.
- (32) *Ibid.*, p. 70.
- (33) *Ibid.*
- (34) *Ibid.*, p. 69.
- (35) *Ibid.*, p. 70.
- (36) *Ibid.*
- (37) *Ibid.*, p. 71.
- (38) Saul Bellow, *The Victim*, p. 1.
- (39) Saul Bellow, *Seize the Day*, p. 66.
- (40) *Ibid.*, p. 100.
- (41) *Ibid.*, p. 66.
- (42) *Ibid.*, p. 77.
- (43) *Ibid.*, p. 89.
- (44) *Ibid.*, p. 66.
- (45) *Ibid.*, p. 96.
- (46) *Ibid.*
- (47) *Ibid.*, p. 75.
- (48) *Ibid.*, p. 9.
- (49) Saul Bellow, "Two Morning Monologues," p. 236.
- (50) Saul Bellow, *Seize the Day.*, p. 77.
- (51) *Ibid.*, p. 82.
- (52) *Ibid.*, p. 96.
- (53) *Ibid.*, p. 118.